

令和 3 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
一般選抜後期

試 験 問 題  
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

## 小論文 教育学部

### 問題

次の文章は、学校教育における美術教育の在り方について、新聞社が千葉大学の神野真吾氏に取材したものです。神野氏が指摘する美術教育の問題点とは何か、また、氏の言う「美術で教える教育」とはどのようなものか、を説明し、あなたは「学校教育における美術教育」はどうあるべきだと考えるか、600字以内で述べてください。

千葉大准教授 神野真吾氏

「ものの見方を変えられることが、美術の大きな価値の一つです」。多様な文化や考え方がぶつかり合う現代社会で、その学びを応用できる教科であるにもかかわらず、こうした視点が教育現場に十分浸透していないと、神野准教授はみる。

学校で学ぶ美術は長年、色彩や造形が重視され、「上手な」作品を作らせることが目的とされてきたといわれる。「先生にセンスがいいと言われた子ども以外は、美術を自分には関係ないものと思ってしまうのではないでしょうか」

日本では、画家や彫刻家らが率いた「作り手中心主義」とも言える美術教育の歴史があり、作品を鑑賞することがなござりにされてきたと解説する。鑑賞は、作品の良さを味わうだけでなく、自分で批評し、新たな意味や価値を見いだすことでもある。この学びが現代ではますます重要になっているが、教師にもそのような鑑賞法を学ぶ機会は少ないと指摘する。

こうした現状に対し、神野准教授は、知識や技能の習得を重視する「美術を教える教育」から、作品鑑賞など創作だけではない美術活動を通じ、他にも生かせる能力を身に付ける「美術で教える教育」への転換の必要性を訴える。

鑑賞は従来、学習指導要領で学習領域の一つだ。だが、実際には子ども同士が自らの作品について意見を言い合うだけのケースもあり、「教室内の人間関係が反映され、本当に感じたことを言えず、あまり意味がない」と疑問視する。

神野准教授は美術館やアーティストと連携し、小中学生の鑑賞プログラムなどを実践し、その中で「アートの思考」を育むプロセスを意識してきた。具体的には、作品を見た際の「感性＝感じたこと」を出発点に考えを深め、創造的な活動（アクション）へと結び付けられるようなプログラムで、日常の多様な場面に応用できるという。

特に重視するのが、自分が見て感じたことと客観的に見えることの区別だ。両者の比較で、自分の見方のバイアス（偏り）に気付き、異なる解釈ができるようになる。そういった積み重ねこそが、複雑な社会を生き抜く武器になると神野准教授は説く。

「ものの見方の更新は、世界を見るレンズを増やすことでもあります。それは他者への共感につながり、世界との関係性を変えます」